

エネルギー環境 教育のひろば

北海道エネルギー環境教育
研究委員会 広報部会
令和8年(2026年)
3月16日(月)発行
第62号



令和7年度 全体研修会開催 -令和8年2月14日(土)-



長堀 裕信 委員長

令和8年2月14日(土)、北海道エネルギー環境教育委員会 令和7年度全体研修会をホテルライフオートにて会同して開催した。研修会の冒頭、長堀裕信委員長より、今年度、函館市立高丘小学校にて開催された「第11回北海道エネルギー環境教育研究大会道南大会の授業についての説明があった。小学校4年生 社会科 小学校5年生 総合的な学習の時間の公開を行った。それぞれの授業での成果と課題を共有し、次大会へつなげていきたい。」と本日の研修会を基に、令和8年度の大会への期待を寄せる挨拶があった。

研究大会 道南大会 報告

～小5 総合的な学習の時間「海の森・ブルーカーボン」

授業者 西崎教諭

～小4 社会科「くらしをささえる電気」

授業者 炬口教諭

続いて、11月に函館市立高丘小学校で行われた、2本の授業について、各授業者取りそれぞれ成果と課題、その後の実践報告があった。また、両授業を通して大会の総括と今後の研究の方向性についての提案があった。



西崎 さくら 教諭

小学校5年生 総合的な学習の時間「海の森・ブルーカーボン」という単元で実践を行った「海が私たちの生活をどのように支えているか、また、人間の活動によってどのような課題を抱えているかを理解することができる。」ことを目標にして考える授業実践である。エネルギー環境教育との関わりとして、「海に関わる地域の特性を生かした教材の工夫」を設定した。3つの視点に基づいた学習展開として、「多くの情報に触れ、選択する」ことで、正しい情報を適切に判断し行動につなげる



力を育み、「体験的な学習」を通して、海が抱えている課題が自分たちの生活に大きく関わっていることを知り、「世界から地域、地域から世界、そして自分ごとへ」意識が向かうために、広い視点・狭い視点を融合させて学習を進めていくことを目標とした。このことを通して、自分の生活と海との関わりに気づき、判断、表現することをめざした。

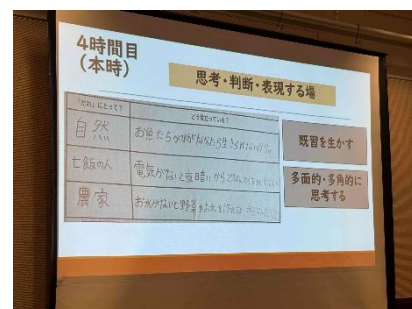
本時では、「海の森を守るために、自分たちにできることは何か」を考える1時間とした。成果として、①お互いに対話を通じて理解を深めることができた。②身近にあるコンブの価値を再認識することができた③ICT 掲示板を活用し、それぞれの考えを全体に共有できた。課題として、未履修の学習内容が含まれていることがあったが、視覚的な資料を補助として準備することで、理解を図ることができた。ブルーカーボンを扱った教材を通して、自分たちの学びを広く生かしていこうとする姿が見られ、成長を感じたと結んだ。



炬口 毅充 教諭

小学校4年生 社会科「くらしをささえる電気」という単元で、「身近にある七飯水力発電所の事業を中心に、電気の供給の仕組みや経路・人々の協力について理解すること」を目標にした授業実践である。エネルギー環境教育の視点から、教材化にあたり

「子どもにとって身近な七飯発電所を教材にすること」と3つの視点に基づいた学習展開として、「七飯発電所が果たす役割」「ゲストティーチャーとの関わり」



「環境や産業のコラボレーション」をねらった。

本時では①七飯発電所の事業によって誰がどのような恩恵を受けているのかを考える学習を通して、電気を供給する事業が果たす役割について考えたり、選択したり、表現したりする。②学習したことを基に、これらの電気の供給について大事だと思うことや自分たちが協力できることを考えようとしている姿をねらって進めた。本時の学習課題は、「七飯発電所は誰（何）にとってどのような役割を果たしているのか」を考える1時間とした。児童は、七飯町の人・農家の人・働く人・自然・学校の5つの視点から課題に迫った。児童からは、授業を通して既習を生かしたり、多面的・多角的に施行する姿や、今後の自分の姿を明確にしたりするなど様々な視点から課題にせまっていた。成果として、電気の安定供給だけではなく、地域産業を支える新たな価値への気付きにつなげることができた。エネルギー活用と地球環境への思考や、学習したことを生活に生かそうとする態度を引き出すことができた。一方、課題として単元設計に工夫が必要であったこと、本時の展開に工夫が必要であった、と報告した。



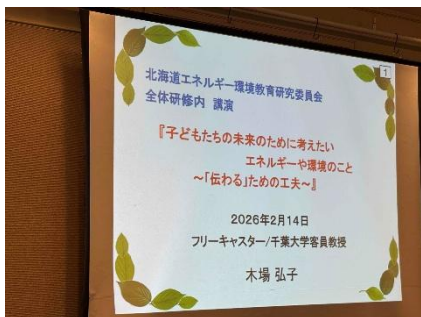
次に、大会の総括と本会研究の方向性について、研究部会：佐藤 深教頭（光陽中学校）から説明があった。右に示したスライドのように、本研究委員会のこれまでの実践や研究内容について資料を基に説明があった。「希望」から「覚悟」へ：エネルギー環境教育研究が育む「生きる力」とは何かを2実践を基に振り返った。発達段階による「未来観」の変容が、4年生段階では、無邪気な信頼から、5年生段階では現実的な覚悟へと変容した。時期指導要領を見据えた新たな視点を加え、持続



可能な社会の「創り手」を育む実践を重ねていくことを確認した。次年度札幌市で開催の大会を、本委員会で全力を挙げて成功に導きたいとの説明で締めくくられた。

講演会『子供たちの未来のために考えたい エネルギーや環境のこと ～「伝わる」を意識したご提案～』

講師：フリーキャスター・千葉大学客員教授 木場 弘子 氏



講師に木場弘子氏を迎え、表題の通りご講演をいただいた。氏のこれまでのご経歴を踏まえ、エネルギーや環境について、「伝える」ことを意識した内容は、どの例も分かりやすいものであった。例えば、量を伝える際に、よく東京ドーム〇杯分といった表現が使用される。しかし、相手にとって、分かりやすいものとする場合、具体性がなければならぬ。ドーム1杯分は大体、学校のプール500杯分、など言い換えることで聞き手の理解が深まる。このように、対象者が「腑に落ちる」形で伝えることが、相手の動機付けとなり、行動につながる。そこまで至って初めて、情報は生きたものになる。講演では、クイズを交え、会場全体がエネルギー問題について考える雰囲気生まれ、真摯に課題に向き合いつつも聞き手に関心を示してもらうための工夫が随所に見られた。木場氏は日頃から、人とのつながりを重視しており、対象者に合わせて相手が具体的にイメージできる伝え方を工夫することを先生方に期待していると述べた。加えて、様々な視点で資料を読み解くことの大切さも強調された。木場氏の具体的かつ説得力のある講話は、今後のエネルギー環境教育も含む本会の研究において、根幹となるもので、大変示唆に富んだご講演となった。



北海道電力株式会社の木林尚稔広報部長からは、泊発電所再稼働に向けた取り組みの様子、審査状況・進捗状況についての情報提供があった。

令和8年度総会開催のご案内

- 日時 令和8年5月16日（土）
○受付開始 13:00 ○開会 13:30 ○終了予定 16:00
 - 場所 ホテルライフオーブ札幌
 - 内容 ○エネルギーに関する学習会
○役員人事発表、年間活動計画審議
- <今後の予定>
- 研究大会 令和8年11月
札幌市
 - 全体研修会 令和9年2月13日（土）
ホテルライフオーブ札幌